

北岳より高い山・台湾「武陵三秀」縦走

2017年11月1日～5日 旗振支部 瀬川 滋

台湾・東北海岸の宜蘭から山中に入った雪霸国家公園に「武陵四秀」という東から西へ喀拉業山(3133m)・桃山(3325m)・池有山(3303m)・品田山(3524m、四秀の最高峰)と連なる山塊がある。品田山から西には台湾第2(戦前は日本第2)の高峰・雪山(3886m、日本名:次高山、9年前に登頂済)が連なる。昨年台湾最高峰・玉山(3952m、日本名:新高山)に10名で登ったが、その反省会で一部のメンバーから次は「武陵四秀」に登ろうということが纏まっていた。検討の結果、半分の5名が麓の武陵山荘から品田山、池有山、桃山の三秀周回、それもがけ無しで登るということが決まった。因みに日本第2の高峰北岳は3192mなので、縦走路全体が北岳より高いということになる。

台湾の3千m以上の山に入るには当局からの国立公園入園許可(山小屋宿泊許可も含む)と警察からの入山許可を取らないといけない。この手続きをがけ付きであればがけがやってくれるが、がけ無しの場合は全て自分でしなければならない。仲間の1人に奇抜な人がいて、これを全てやってくれるという。調べてみるとがけ無しの場合はメンバー全員が台湾の3千m以上の山の登頂経験を示す証明が必要だという。幸い昨年の玉山登頂時にがけから登頂証明を貰っていたので、それを使えば良いということになった。

昨年同様台湾で最も晴天確立の高い11月に登ろうということになり、1日離日して武陵山荘泊、



最終的に纏まった行程

2日に登山開始して新達山屋(泊)→品田山→池有山→桃山山屋(泊)→桃山→武陵山荘→台北(泊)で、5日帰国という計画の申請を行った。台湾の3千m級の山では山小屋の収容人員以上は許可が下りず、生憎3日(金)の桃山山屋が満室で申請は不可となってしまった。暗転。そこで山小屋の混む金曜日の小屋を収容力の大きな新達山屋にして、2日に桃山山屋泊、3日に新達山屋泊とルートを逆方向にして再申請したらラッキーにもOKとなった。手続き全て完了したのが10月12日。冷や冷やものだった。

11月1日

早朝関空からLCCで台北、台北から高速バスで宜蘭、そして宜蘭からタクシーで武陵山荘に着いたのが夕方。台湾には多い国営の宿泊設備でビザ無料並み。まず装備の最終点検。山小屋は無人なのでシルフ、防寒衣料、雨具、2泊3日6食分の食料等々を確認。ここで問題になったのが水。両山小屋共に近くに水場は無い。ただ雨水が蓄えられているが、その容量は小さくて乾期なので期待出来ないという。ただ新達山屋の周囲には小さな池がある。もし最初の小屋が当初の計画の新達山屋なら、池の水をフィルタで濾して煮沸すれば飲用出来るので、上げる量は登山時の分だけで大して要らない。しかし桃山山屋の場合は小屋での食事2食分と新達山屋までの移動分も必要で、3Lとした。そして夕食。まずビールを頼むと、アルコールは提供していないという。周りは殆ど大人の男子なのに信じられない。そこ



武陵山荘から見える桃山

で頂上で飲むべく準備していたウイスキーをこっそり持ち込んで、明日からの山行の無事を祈って乾杯。2種類の火鍋を楽しんだ後、早々に就寝。

11月2日

山荘からは本日の目標、桃山が朝陽を浴びて輝いている。標高差は約1400mで、急登で知られる笠ヶ岳・笠新道とほぼ同じ。笠新道を登った時は約30年前で若かったのと小屋泊だったので荷物はそれなりだったが、今回は大違いで登れるかどうかいささか不安。ともかく山荘を7:40スタート。山荘裏の武陵吊橋からの林道は舗装もされていて傾斜もきつくないが、桃山登山口からは本格的登り。登山道は道標もしっかりしており、道だけでなく道の両側数mまで下草が刈られている。日本では考えられない整備振り。高度を上げていくと東方に3000m級の山々が眺められる。この辺りの広域地図を持ってないため山の同定が出来ないのが残念。休憩を何回も繰り返して14:30桃山頂上に到着。麓の武陵農場と3000m級の山々からなる360°の展望が素晴らしい。日本陸軍・陸地測量部が作った三角点もある。やったあって感じ。暫く楽しんだ後にすぐ下にある小屋に入る。許可証には小屋での寝る位置まで指定されており、そこに荷物を置く。混雑する日本の山小屋とは大違い。小屋の外に出てみると、屋根の雨樋から雨水がタリタリに引き込まれており、タリを捻ると水がホッホッ。水問題は杞憂だった。トイレもしっかり整備されていて最高。



桃山山屋と大覇尖山等3000mの山々

11月3日

早朝起き出し、もし晴天ならすぐ上の頂上でご

来光をと思うが、雲が多くて諦める。朝食を済ませて6:30出発。日本では考えられない高さの縦走路だが、岩稜が多いとはいえ森林限界が高く松の豊かな森の中を歩くので高山の気分はそんなにしない。アップダウンを繰り返す道からは、中覇尖山、大覇尖山(世界奇峰の異名を持つ)、そして小覇尖山の威容とそれを繋ぐ稜線が手に取るように眺められる。それらの山は全て3000m級。3000m級の山は日本では富士山も含め21座なのに対して、九州とほぼ同じ面積の台湾では日本統治時代には48座だったのが、現在は253座が削外されているという。削外の仕方が異なる(例えば双耳峰の鹿島槍、日本では1に対して台湾流では多分2?)からと言っても驚き。そして何よりも雪山方面が素晴らしい。麓から雪山を経て雪山北峰までの稜線が穏やかに続いており、第1圏谷・第2圏谷が同時に眺められ、昔この辺りにも氷河があったことが良く分る。三叉路口を過ぎてすぐ大規模な落石現場に遭遇し、石の上をバウンスを取りながら進んで行くと10:40池有山頂上。未だ未だ先があるのですぐ引き返し今日の宿泊地・新達山屋に向かう。途中有



有名な一本梅(翌朝撮影)



最高峰・品田山を望む

名な母の一本木が美しい。

小屋に荷物を置いて品田山に向かう。途中断崖を登る。ロープはあるものの残置ロープが多過ぎ、それぞれが交錯していて扱いづらそう。そんなロープには頼らず、岩角を三点確保で登る。登り切って暫く進むと今回山行の最高峰・品田山山頂(3524m)に 14:30 着。小雨模様で四囲の眺めが得られず、すぐ引き返し、16:30 に小屋着。

11月4日

早朝 4:40 に小屋を出発。雲海が素晴らしい。特に雲海の向こうにシルエットに輝く山々や一本木が美しい。



雲海の向こうに連なる雪山の山並み

三叉路口まで戻ってきて下山路を下る。道は良く整備されているが登山路のような下草までの刈

込みまではしていない。9:30 に池有登山口まで下りてきてからは舗装された林道。これが長い。疲れている身には辛い。1 時間歩いてやっとこさで武陵吊橋(山荘)着。そしてそこからバス峠まで歩けば更に 1 時間余り。ここがヒッチ出来て楽々。昼食後、バスを乗り継いで台北へ。途中山道で事故による渋滞に遭い、昨年泊まった劍潭青年活動中心に着いたのが 20:00。昨年以下では半袖・短パンだったが、今回はコートが要る程寒い。今夜が山小屋泊だったら大変だったろうなと思う。早々に荷物を置いて、町に出かけて遅い夕食。乾杯のビールが格別だった。

11月5日

朝早く車を撤収して関空に戻った。そして空港食堂で昼食。そこでの久々の和食の味で帰国を実感した。

今回の山行、天候は昨年のオール晴天とはいかなかったが、その分小屋の水には不自由しなかった。また日本からの登山者がそこそこある主役の玉山・雪山と違って、「武陵四秀」は殆ど日本人が登らない脇役。そこでの経験全てが新鮮であった。特に山中で出会った台湾の登山者は皆若くて元気。爺婆がウヨウヨいる日本の山に慣れている身にはそれがとても強烈だった。